
あの日

黒影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日

【Nコード】

N7869P

【作者名】

黒影

【あらすじ】

この物語はとっても不幸な主人公 百瀬^{ももせ} 綾^{あや}によります万丈波乱な人生を書いておりその綾が恋をするお話です。

保育園編（前書き）

時間がある人は読んでいってもらえたら大変うれしいです。
初投稿なので文字の間違えなどがあつたら教えてもらえたら光栄です。

できれば感想を書いてもらえたら大変うれしいです。

保育園編

今から書きます作品は、自分の日常を少し変えてから書こうと思つてます。

まあ自分は作品にはでませんが 中には「これ俺じゃねえ？」と思うかもしれない（ごめんね〜（´・ω・`）ゞ
まあそんなこんなで書こうと思います。

人物紹介

・不幸な少女 百瀬 綾（ももせ あや）
・友達 古河 ひより（ふるかわ ひより）

今は2010年 不幸の始まりは今から10年前さかのぼる。

そう あれは当時まだ私が5歳だった頃 友達だったひよりちゃんと一緒にボール遊びをしていた。

ボールの大きさは・・・う〜〜〜ん？どのくらいだったけな？
たしかバレーボールぐらいだったような？

そのときもいつものように外にでて壁にボールをぶつけ遊んでいました。

交代ずつボールを投げてはねかえってきたボールをとっていました。
ひよりちゃんがいつもより少し強めに投げボールを投げどこかにボールがいつてしまいました。

ひよりちゃんと離れてボールをさがしていて あった！ 道路でちようどボールが止まっていました。

私は急いでひよりちゃんに「あったよ！」と言いボールを取りに行きました。

ボールを取った瞬間耳に響くクラクションの音
音が鳴り終わった直後に 顔中がとても痛い 頭もくらくらする

意識も遠ざかっていき

そのまま目をつむりました。

それから 目が覚めたのは 次の日の朝でした。

なんか顔に違和感がある。そう思い触ってみると顔中包帯で巻かれていました。

目の前には パパ と ママ が泣きながら私の名前を呼んでいました。

私はあまりあけない口でママに聞きました。「あやどしたの？」
そしたらママが「あなたはボールを取った瞬間車にはねられたのよ！」

ママは泣きながら私にそう言ってくれました。

私の包帯が取れたのはそれから3日後でした。

私は お医者さんから渡された鏡を見てびっくりしました。

いままでの顔とぜんぜんちがいはねられたときの跡が顔にくつきりについてます。

当時の私はぜんぜんなんとも思いませんでしたが 本当の不幸はこれからだっただけです。

小学生編 その1

私 百瀬綾は5歳の時に車にはねられ大傷を顔にのこしてしまった。
まあ保育園時代はそれでよかったんですけど 本当の不幸はこれから始まるのでした。

待ちに待った 小学校の入学式 みんなテンションが→→でわたしも→→でした。

そしてクラスは、1-1組でした。

先生のお話があった後、休み時間。保育園からの友達のひよりちゃんも1組ですつとお話していました。

ですが・・・

放課後クラス1のやんちゃもの まえばらゆつと 前原裕斗が

これからも傷つけられる銃のひきがねをひいたのです

「なんだ その傷化け物みたい 化け物 化け物 化け物 化け物」

その前原君につずき クラスのみんなで私を化け物よばあります。
私は自分が化け物と呼ばれているのにきずき急いで家にかえりました。

私は自分のベットで泣きつづけました。

その後も学校にいったら 「化け物」と言われつづけました。

先生にも相談しましたが助けてはくれませんでした。

それから時は 流れ私は12歳になりました。(小学校6年生)

6年最初の始業式。いつものように校長の退屈な話を聞いてました。
すると司会の田中(算数教師)が

「いまから転校生を紹介します。」

私はいまから来るこの転校生のおかげで人生が変わるとはまだ気づいてはいませんでした。

小学校編 その2

算数（司会）の「田中が転校生を紹介します。名前はくくく」と言った。

私は半分眠りかかっているが名前聞こえなかったけど確かに転校生がきたんだよね？

私はどんな子だろうとおもいその生徒が見えるようなところにいました。

そして彼は中央に立ち

「長崎から来ました 美好魔郷みよしまごうといいます。

これから中学生になってもよろしくおねがいします。」
私（ほかの人はどう思ってるか知らないけど）なかなかの 美形イケメンだった。

彼は社交性も高く成績は上の下 運動神経もなかなかいいほう。まわりからみたら たぶん 理想の彼氏 だと思う。

そんなこんなで委員会決めがあった。先生の推薦で生徒会はどう？といわれていた。

ちなみに私は図書委員だった。

けど彼はひととおり委員会を見て図書委員で止まった。

彼は「先生 僕 図書委員がやりたいです。」と言っていた。しかもなぜか彼は私のほうをみて満点な笑顔をみせていた。

彼はなぜほかに可愛い子がいる委員会に行かなかっただろう？とおもったけど

やっぱりそう思うのはやめにした。どうせ顔のことをバカにしたいだけなんだろうなと思った。

なので彼とはあまり口を聞かないようにしている。（しゃべりかけてこないけど）

けどその日はなぜか違った。

今日は委員会ごとの話し合い。

もちろん早く終わらせて帰って寝たい私は適当に「はいはい」言っていた。

そんなときに 美好魔郷君 がシャーペンを持ってメモ用紙に何か書いている。

そこで先生が行った後私の目の前には一枚の紙があった。

メモの内容は

「これ終わったらちよつときて」
だった。

小学校編 その3

私（百瀬綾）はやっぱり信用してなかったので手紙に「ちょっときて」と書いてあってもいく気はなかった。

そこで考えたのが 帰ろう そう思ってた帰ろうと思い図書室から抜け出そうとすると

目の前に 美好魔卿 がいた。

「やばい！！」と思い全力ダッシュwwww

魔卿が走って来る。

やっぱり運動神経がいい魔卿はすぐに私を捕まえた。

魔卿が「なんで逃げるんだよ」

私「別に逃げてない」

魔卿「嘘つけ！」

私「・・・」

魔卿「お前 自分がクラスからバカにされてるの顔のせいからだとかお前思っているだろ？」

私「・・・」

魔卿「それはちがうぞ」

私「どうしてそんなことが言えるの？」

魔卿「俺の前の学校にお前と同じような子がいたから」

私「・・・」

魔卿「その子は最初は今のお前のようにしょんぼりしていたさ」

私「あなたはまだこの学校にきてから2ヶ月ぐらいしかたっていないじゃん」

魔卿「・・・」

私「なんで2ヶ月しかたっていないのに私の気持ちがわかるって言うの？」

私はこの言葉を言っただけで帰った。後ろを振り向いたら彼は下をずっと見ていた。

次の日彼は学校を休んだ。

家が近くと言う理由でプリントも彼の家に持っていかなくてはならない。

先生から言われたら反論ができない。

しょうがなくプリント私に行こうと彼の家に向かう。

彼は熱を出し学校を休んでいるそうだ。

そして彼の家のインターホンを鳴らした。

できれば母か父が出てきてほしかった。（昨日のことがあったので）ガチャ。

ドアが開いて出てきたのは魔卿だった。

彼はマスクをしていてプリントを渡したら

魔卿「ありがとう」

私はすぐに帰ろうと思い足を動かした直後。

魔卿「待つて」

私「なに？」

魔卿「昨日はごめん」

私「それだけ？」

しばしの沈黙・・・

魔卿「俺お前のことが・・・」

ゴゴォー飛行機が通る

私「何？最後のほうあまり聞こえなかった」

魔卿「いやたいしたことじゃない」

魔卿「それじゃまた明日。」

私は？を頭に浮かべながら家に帰った。

最終章

私（百瀬綾）は不幸なことにも車にはねられ顔に傷がつく
そして不幸な人生をおくっていた。

前回風邪で休んだ魔卿まさこにプリントを私に行った。

渡した後の話をしないといけないの？

はあゝ まったく めんどくさいものね？

じゃあ特別に話してさしあげるわ （お嬢様になってみた

あの後何も気にせず家に帰って寝たわ。

はい 終わった。これでいいんでしょう。

なに？ だめって？ 次の日の学校での出来事も？

まったく あなたって よくばりね。

しょうがないな。

くろかげ「おい 百瀬。そろそろやめないか？ そのお嬢様言葉
たぶん読者からしたらイライラするぞ。」

私「はいはい ちゃんとするって」

じゃあ（本当に）始めましょうか。

ジリリリリイイイ

目覚ましの音。

私「たく。今何時？」

時計を見ている。

時計は8時をさしている。

私「まさか。そんな・・・」

普通なら完璧な遅刻だ。

どうしよう・・・

そうだ 車で送ってもらおう。

私「お母さん」

返事が返ってこない。

あたりをみまわしても人はいない。

もう学校に行つて素直に謝ろう。

そう思い学校へ向かう。

学校につき上履き入れを見たらなんかある。

どうせ悪戯だろう。

そう思い一樣確認してみる。

紙を開けると宛名は 魔卿 からだった。

「放課後ちよつと用がある」

ええー ちよういきたくねえー

ま暇だし行つてやるか。

そんなこんなで（手紙の後先生にめっちゃ怒られた）放課後

私の中の天使と悪魔がささやいている。

天「いつてやりなよ」

悪「なんでそんなのにいかないといけないんだよ」

天「なんか相談事かもしれないじゃん」

悪「ますますいく気なくしてきた」

天「ねえ行きましょう？」

悪「いくことねえよ」

私「あゝもう うるさい 行けばいいんでしょう行けば。」

そう天使と悪魔に言い聞かせた。

そして放課後の教室。

みんないない教室。

そこに二人きりの私。

私「で。用件はなに？」

魔卿「・・・」

私「どうせ私をバカにしたいんですよ。」

魔卿「ちがう」

私「じゃあ何？」

魔卿「・・・」

私「もういい 帰る。」

魔卿「ちよつと待って」

魔卿に手を握られる。

私「なに？」

魔卿「用件って言うのは・・・」

私「なに？（怒）」

魔卿「俺お前のことが・・・」

私「最後のほうなんて言った？」

？

くろかげ「あれ、これどこかで」

えーす！「静かに！ あっ これ本編に入ってますよ」

くろかげ「やばいやばい退散しまきやまずい」

えーす！「じゃあ続きを」

私「今の人たちだれ？」

魔卿「知らない」

私「で なんだったけ？」

魔卿「・・・」

私「何なにか言いにくいこと？」

魔卿「・・・」

私「言ってみなよ」

魔卿「俺」

私「・・・？」

魔卿「お前のことが」

私「・・・！」

くろかげ「おお」

えーす！「くろかげ氏 本編に入っではいけないですよ」

くろかげ「いや なんか 少コミ」少女コミックみたいな展開じゃない？」

えーす！「少コミに作者がですか？」

くろかげ「いいじゃん。いいじゃん。」

えーす！「だめです。さあいきましよう。」

私「今の人たち誰だろうね？」

魔卿「・・・」

私「今度こそ言ってごらん？」

魔卿「俺お前のことが」

私「なにになに？」

魔卿「好きだ！」

私「え??」

私はこの後のことをあまり覚えていない。

ただ走って走って走りまくった。

そして家のベットのダイブした。

私「そうだこれは夢だ！」

私はホッペをつねったり顔を洗ったりしてみた。

夢じゃない 現実だ！

でも ありえない。

顔に傷がついている私を選ぶなんてありえない。
だってほかに可愛いい子がいるのになぜあたし。

もおいいや 寝ちゃえ 寝ちゃえ。

くろかげ「これまで不幸な人生を送っていた少女がついに幸せを手
につかんだ。

とりあ

いずハッピーエンドで」

えーす！「なぜ くろかげ氏 が締めちゃってんですか？」

くろかげ「えっ 締めちゃいけなかったの？」

えーす！「そういうのはキャラクターが締めるでしょう」

くろかげ「ええゝ だって締めたかったんだもん」

えーす！「もうしょうがないな」

えーす！「ではキャラクター版もどうぞ」

主人公 . . . ももせあや 百瀬綾

主人公の彼氏 . . . みよしまさこ 美好魔卿

友人だった . . . 古河ひより（ふるかわ ひより）（かわひより）

綾・魔卿・ひより「ハッピーエンド」

綾「いままで読んでくれたみなさんともありがとうございました。
作者〃くろかげさんがまさか登場するとは私もビックリしました。

まあいろいろありましたけどたのしかったですか？

面白くなかった人はごめんなさい。

まあそんなこんなで

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7869p/>

あの日

2011年1月3日20時53分発行